

山人 (投稿)

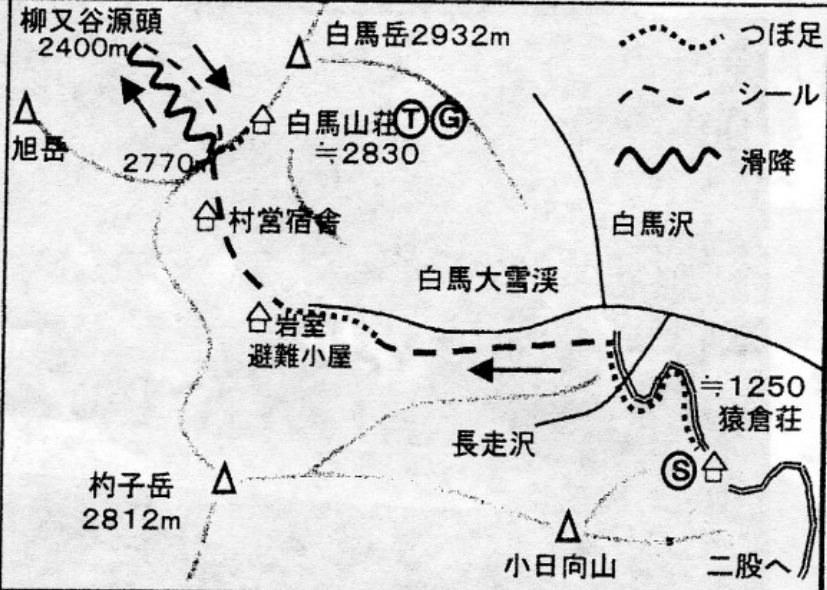
山行報告書

山名	白馬岳～白馬鍾温泉		報告者	長岡浩一		
2001年5月18日	下土狩19:00～猿倉23:00					
2001年5月19日	起床4:45～出発6:15～大雪渓:7:00～村営頂上小屋11:20～主稜線11:50～柳又谷へ370m滑る(12:05-13:20)～白馬山荘13:40 就寝20:00					
標高差	△S	1250m	～ G	2830m (+370m) ≒ 1950m	体力度	1・2・3④・5・6
	▽	2770m	～	2400m (柳又谷) ≒ 370m	技術度	1・2③・4・5・6
走行距離	下土狩	～	猿倉	≒ 260 km	展望度	1・2・3④・5・6

- 参加者
- タカノリ シビレタ!
 - トミー 極楽～地獄
 - ヒデコ 軽～いスキーとよく効くシールが欲しい
 - コーイチ ジリジリという放電音が耳から離れない。

二股から猿倉への道路について、3日前白馬村役場へ問い合わせたところ、運がよいことに本日(18日)17時に開通ということだった。除雪は終了したが、工事中だったそうで、ラッキー。猿倉荘の1段下の駐車場にテン泊。即シュラフに入る。

19日、テントから出ると快晴。朝食後、上の駐車場へ移動し、スキーをリュックにつけて出発。今回、山小屋での飲み代を節約する為、タカノリは日本酒2L・ウイスキー0.3L・ビール2本、トミーとヒデコはビール3本ずつ、コーイチはビール7本、少々重い、山荘前でアルプスを見ながらの大展望ピ



アガーデンをと期待し、がんばる。林道には路肩に雪が少しあるだけ。

大雪渓に出てシール登りに切り替える。昨年6月に来た時よりもだいぶ雪が少ない。といっても十分な量であるが。天気がよく気持ちが良い。今日は穏やかな山行になりそうだと誰もが思った。グングンと高度を稼ぎ、ヒデコは「このままシールで上まで登れそうだ。」とおっしゃる。左の杓子側から頻りに激しい落石の音がして気になる。2ピッチでネブカ下の急登の取り付きまで来た。この急登はスキーは担いだ方が楽だ。前方、杓子岳と白馬岳のコルにはまだ巨大な雪庇が残っていて、崩れたらブロックがここまで来そうだ。時折濃いガスが降りてくる。

急登を終えると、立派な避難小屋が建っている。えっ、こんなのあったっけ。去年建てたの?とにかく雪が少ない。ここはちょっとした尾根になっていた。10mは少ないのでは。ここから再びスキーを履く。村営宿舎までの間、ヒデコはシールが後滑りして疲れ果ててしまった。

村営頂上宿舎で一休みしていると、激しいアラレが降ってきた。いやー、雷にならなければよいが。10分程でアラレは弱くなり、スキーを手に持って宿舎裏の急斜面を上がる。主稜線11:50着。出発から5時間半。標高差1,500mちょっと登った。時間も早いし、疲れてもいない。旭岳が何とか見えるし、アラレの降り方も弱いし、雷鳴も稲光も確認されないので、柳又谷源頭へ1本滑りに行くことにする。ヒデコは疲れたのであとから行くというので、12:05男3人でサブザックで出かける。

ほどよい斜面をどこまでも滑って行きたいが、12:20標高2400mでやめ、ビールで乾杯し、12:30シールを貼って登り返す。ヒデコは来ないようだ。ここではほとんど雨である。時々ガスに包まれる。3分の2ほど登り返したあたりで、雪倉岳方向から雷鳴が聞こえてきた。こっちへ来ないことを願う。稜線近くになって風とアラレが激しく、雷鳴も近くなってきた。ヒデコが白馬山荘へ先に行ってくれてるといいのだが。

13:20リュックに戻るとヒデコも荷物も無いので一同ホッとする。荷物をまとめている間にアラレはますます激しくなり、雷鳴はほとんど頭の上でしている。もちろん周りには何も無い。怖くて立てない。しかしいつまでもここにはいられない。思い切ってスキーを手に持ち立ち上がった時、スキーの先からジリジリと音をたてて放電し、青く光って頭上で大音響がした。思わず、アッと声を出して地面にへたり込んだので、トミーはてっきり私がやられたと思ったらしい。放電直後はだいじょうぶだろうと、先へ進むとタカノリが待っていて、スキーを持っていた両手がビリッとシビレタという。そばにいた女性2人は背中中のピッケルからやはり放電したという。少しじっとしていると、勇気があるのか何なのかスキーをリュックに高々と背負ったパーティが来た。言うまでも無く、私たちはこの方達のすぐ後ろを背をかがめて続いた。

15分ほどで白馬山荘着。全員無事で握手をする。怖いもの知らずのヒデコは心配になって迎えに出ようと思ったらしいが、出なくて正解。乾燥室へ濡れたものをぶら下げ、14:30ストーブのある談話室で酒盛りを始めるが、思ったより酒が減らない。少し寒いのと、酒を爛できないのと、怖い目にあつたからか。大雪渓を登る時見かけた徒歩の大パーティは、太田労山の方たちで、話をすると会員数は500人もいるというから驚く。雷と風アラレは暗くなるまで続いた。夕食のカツは厚くてやわらかくおいしかった。さすが白馬山荘。

夜、雷とアラレはやんだが、強い風はずっと窓をガタガタとたたいてうるさかった。

本日の反省

1. 激しいアラレ(雨も)は雷になると思うべし。
2. まだ雪が降るので、防寒対策は冬用までではないがしっかりと。
3. 雷が近い場合スキーは持たない。



杓子、鍬をバックに大雪渓上部を登る

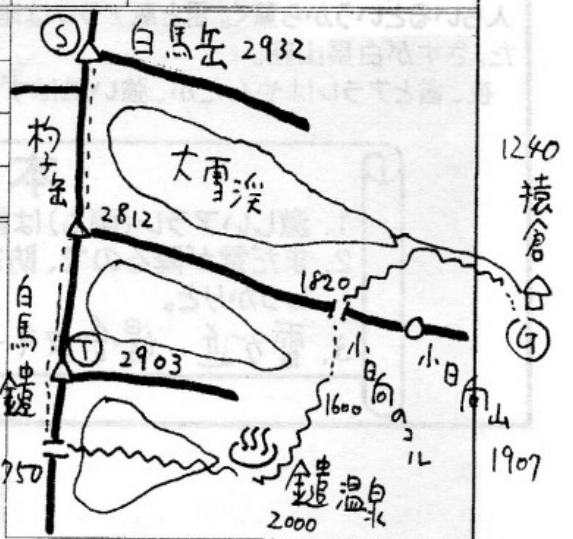
山名	白馬岳(2932m)・杓子岳・白馬鍾(2903)	報告者	加藤 秀子
----	--------------------------	-----	-------

この山のセールスポイント	3千m級の稜線は展望が素晴らしく 其処から滑る快感は！！！！だ。
--------------	-------------------------------------

5月13日(日) コース及び タイム	起床 5:00/6:45発～白馬鍾8:55～コル 9:10/9:25～鍾温泉10:00/11:15～ 猿倉着 13:10～十郎の湯(入浴)～そば屋～富士IC 19:00
--------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------

標高差	△ 100+200+220 ÷ 520 m	体力度	1・2・3・4・5・⑥
	▼ 1150+600 ÷ 1750 m	技術度	1・2・3・4・5・⑥
		展望度	1・2・3・4・⑤・6

CL	タカノリ	定番コースにしたいですね
	コーイチ	凡そで背中が焼けてカイカイ
	トミー	天国と地獄を味わった。
	ヒデコ	突風の凄さと滑りの醍醐味。癖になりそう



二
日
目

ゴォーッ。凄まじい風が一晩中唸っていた。ガタゴト音をたてる窓ガラスと、毛布もなくヒンヤリと冷たい布団に違和感を感じながらも、いつの間にかグッスリと眠ってしまったらしい。珍しくトイレにも立たず目が覚めたのは既に5時をまわっていた。

相変わらず風の音が凄い。雪は10cm程積もったようだ。食堂手前の談話室に下りていくと皆一様に窓ガラスをのぞき込み今日の出発を何時にするか思案顔。私達は予定通りとする。6時に食事を済ませ、スキー板をザックにつけ出発。ガスはない。正面には雪のラインが美しい杓子岳、ツンと尖った名前通りの鍾ヶ岳、右手には雄大な剣・立山連峰が望める。素晴らしい！雪山の醍醐味はこの展望の良さも欠かせない。

一步尾根に出るとモーレツな風の出迎えだ。風に身体をとられないよう腰を落として大きなガニ股で歩く。その歩き方を自分で想像して可笑しかった。尾根は風で飛ばされるのか雪はないが、岩のゴロゴロした道はスキー兼用靴では歩きづらいものだ。風に煽られて直ぐにバランスが崩れる。しかし、この頃はまだ「東吾妻での突風に比べればまだまだ」と心に余裕があった。

丸山から杓子岳へ向かう最低鞍部にかかると、吹き上げてくる凄まじい風に身体が止まってしまった。立っていることさえ出来ない。CLは振り返り、『グズグズしていると却って危ない。一気に行くゾ』と前のめり姿勢でアッという間に鞍部を抜けて行った。真似をしようにも地から足を離す事ができない。左はスッパリ切れた雪渓だ。耐風姿勢ばかりでは前へも進めず、下りでは匍匐前進も難儀だ。そこで思案の挙げ句、風に向かって四つん這いになった。そして片足を横に伸ばし、伸ばした方の足に体重を移動させ、もう片方の足を縮める。いわゆるカニ

の横バイっていうやつ。その私の後ろを「オットット」の前つんのめりの恰好でコーイチが駆け抜ける。トミーは私と同じ恰好のカニの横バイだ。不恰好だが飛ばされて滑落するよりはいいと真剣そのもの。やっと抜けた時は「ホッ」とした。後方に白馬岳がやけにきれいに見えて感動する。尾根道に人影はない。この行程は私達だけなのだろうか。

鞍部から登り返し、杓子岳の雪に覆われた山腹をトラバース。鑓ヶ岳との鞍部から岩屑と雪交じりの急登が始まる。ジグザグの急登は風が強い箇所は、両手がフワッと上がったまま下がってこない。風に対抗して、前つんのめりの恰好で歩いていると、風の弱い場所ではそのまま前につんのめる。風の圧力で息をするにも苦しい。こんな経験は初めてだった。

やっと頂上に着いた。が、クレハスが所々に発生し、滑降は不可能とCLの判断で2750mの地点まで下る。此处からは素晴らしく美味しそうな雪溪の斜面が待ち受けていた。苦労の甲斐ありというものだ。小休止をとったあとCLが先陣をきる。続いて私。適当に腐った雪の足応えがたまらない。大雪溪のようにデブリもなく、舐めたようなきれいな雪面が「ウー。美味しーい！」風はピタッと無くなり、小気味のいい程ターンが決まる。身体中の血管が脈打ち、気分は昂揚、最高潮に達した。コーイチもトミーも満面に笑みを浮かべ超満足顔だ。

(注・1)

中腹で休んでいた4人のパーティと歓談した後、下っていくと小日向から上がってきた会員の小岱氏とその友人の後藤氏に出会う。鑓温泉で待つ旨を伝え更に下る。沢を下るにつれ雪は重くなり、雪面は凹凸になるが、下方に見える温泉に心ははやり気にならない。滑り込むと温泉の手前に18人位のパーティが下る準備をしていた。(スキー全国連盟の頓所氏だったと後でわかる)。鑓温泉は冬季は小屋をたたみ、跡形もないがプールのような露天風呂には、既に7~8人の先客がいた。雪山を背景にその光景は実にノンビリと長閑な眺めだった。

我が男性陣は、服を脱ぐや否や湯殿に飛び込む。標高2000mの露天風呂は日本第3位。豊富なお湯は何処から沸き出るのがザーザー溢れていた。見ていた私もたまらず、下着を着けたまま飛び込・・・もうとして「ツルッ」と滑ってその儘お尻からドッポーン。やると思ったとは皆の弁。温泉に浸かりながら、雪で冷やしたビールを飲み極楽。極楽。CLだけは温泉でビールを温め、『これがホントの爛ビール(缶ビール)』と寒い洒落を言っていた。

暫くして、両氏が到着。小岱さんとは初顔合わせで自己紹介。冬は山スキー、夏はマウンテンバイクと拘りの人生を送っているようだ。スキーの腕前は抜群で、小日向の科尔から猿倉までのブッシュ帯を、ポンポンとジャンプターンで軽く乗り越え、その身軽さには全員舌を巻く。来年は是非指導をお願いしたいものだ。

小日向の科尔からのブッシュ帯は、CLの粘りと根性で一度も板を外すことなく林道までキッチリ滑り込んで今回の山行は無事終了した。駐車場で頓所氏と出会い、露天風呂での18人がそのメンバーである事がわかった。きれいなシュプールは頓所氏のものだったと述懐。

鐘温泉後の大斜面

をすべる



(中) 温泉のビールは

うまかった

(下) 今回の仲間達

雪山
白
水



山一六

(17)

水下の大斜面
をすべる



(下) (中)
オビナタ
小日向の
コルに
登る
から長走

